
勿忘草其一 僕の手には銀の口ザリオ

春功

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勿忘草其一 僕の手に銀のロザリオ

【Nコード】

N6363C

【作者名】

春功

【あらすじ】

身分違いの恋だと知っていた。だからこそあきらめようとしたんだ。僕には彼女を幸せには出来ないと分っていたのに。それなのに彼女を愛してしまった。だから、僕たちはその悲劇を忘れることにした。ワスレナグサ。

プロローグ

忘れナ草短編 僕の手に銀の口ザリオ

ある島に不思議な草があつた。名を忘れナ草。

この島にしか無いその草には非現実とも言える力があつた。

それは全てを忘れさせる事。

自分では忘れたくない。相手も忘れたくはない。

でも、それは必然。

必然だからこそ抗えず、忘れるしかないのだ。

あなたは忘れたいですか？

あなたもコレを飲みますか？ 忘れたくないモノを忘れる為に…

九月四日 巻

九月四日

この島、夕日島は本国から船で約三時間。かなり離れた場所にある島だ。

在民は約百数人で殆どが漁師をやっている。

島自体にこれといった名物すらなかったので外から来る人間は殆どいない。

僕はこの島に唯一ある屋敷、如月邸に住んでいた。

三年ぐらい前に如月邸の主、如月忠光に認められ専属の絵描きをやっている。

僕は才能が無かったのに絵を書いてくれと言われた時は本当に嬉しかった。

それ以降、僕は都会を離れ辺境地、夕日島に移り住んでこの屋敷にお世話になっている。

「峻？」

障子がゆっくり開いた。

そこには綺麗な女性が立っていた。

長い黒髪に綺麗なかんざし、顔は小さく端正とも取れる顔。

そしてすらりと伸びている真っ白な足。

彼女はこの屋敷の跡取りのお嬢様、如月緋歌瑠。

僕より三歳年下だった。

「緋歌瑠様、どうなされましたか？」

「仕事中なら…出直しますね…」

ソプラノの綺麗な声が、か細く聞こえ退き返す。
あっと思った。行かないで欲しい。

「緋歌瑠つ！ 待ってくれ！」

僕は緋歌瑠様を敬称無しで叫び、呼び止めた。
彼女は僕に背を向けたまま立ち止まった。

「…っ」

言った後に気づいた。

僕はなんて事を。彼女の事を雑に扱ってしまった。

「あの、その… 僕は…」

この如月邸に呼ばれるに当たって幾つかのルールがあった。
一つに、如月邸に住む者の上下関係をハッキリするというものがある。

この邸には忠光様、かぐや様、緋歌瑠様の三人が僕より上に位置する人たちだった。

つまり、この三人は敬称で呼ばなくてはいけない。

そしてこの如月のルールに守れない者は如月の者によって即解雇できる。またはそれ以外に準ずるもので罰する。

僕はそれを了承して此処にいる。

「ひ、緋歌瑠様。」

「……………」

素っ気ない感じがした。
そのまま彼女は僕に顔を見せずに部屋から出て行った。
嫌に空しく波の音が聞こえて来た。
やってしまった。僕の奥底にある欲望が飛び出てしまった。
これで僕はまた貧乏画家に逆戻りなのだ。
其の事を考えると胸が重くなり力の無い溜め息を吐いた。

「ん…これは？」

畳の上に銀色に光るものが落ちていた。僕はそれを拾ってみる。
それは銀のアクセサリーだった。

「緋歌瑠様のもの？」

彼女はアクセサリーのデザイナーをしていて特に銀細工には定評があった。

手の平でそのアクセサリーを良く見る。

銀のロザリオで十字架に茨が撒きついている緋歌瑠様らしいシンブルなロザリオだった。

僕はロザリオを力強く握り締める。

彼女との絆をこれ以上失わないために。

少しでもいい。その温もりを感じたい為に。

少しの間僕はずっと握り締めていた。

そう、僕は如月緋歌瑠を愛していたのだ。
ずっと前から。

二つ目のルールがある。それは如月邸では必ずみんなで食事をする事だった。

僕は恐かった。

その場で緋歌瑠様が報告、専属絵描きを解雇、そして元に戻る事に。いやそれより彼女、緋歌瑠様と離れる事を何より僕は恐れていた。広間にはすでに緋歌瑠様がいた。僕が広間に入ると彼女とすぐ眼が合った。

「…」

冷たく無言な顔をしてこっちを見た。

心が急に苦しくなった。彼女にはそんな顔をして欲しくは無い。それは自分のせいであることも分っていた。

僕はそのまま下座に着いた。

「桑野さん、お調子はどうですか？」

丁度お嬢様の母、かぐや様が広間に来られたときだった。

「かぐや様、とてもいいです。」

「そうですね。」

ニコツと笑って緋歌瑠様の隣に座る。

かぐや様は緋歌瑠様と同様にとても美しい方だ。

緋歌瑠様の洋服とは違い、和服がとても上品で清楚な感じをかもしだしていた。

無言な時間が続く。

誰一人喋る事が無かった、沈黙の空間。

「？ お父様は？」

緋歌瑠様が遅すぎる忠光様を心配して口をあけた。

「忠光さんは急な用事でお出かけになったわ。今日は戻れないそうよ」

かぐや様が横目で娘を見て静かに言った。

今日の夕食はこの島の山菜と海の魚介を上手く合わせた島特有の料理だった。

料理人の腕がいい成果どれもおいしい。

「緋歌瑠？ あなた、今日桑野さんの所に行つてどうしたの？」

僕がお味噌汁をおいしくすすっていた時だ。かぐや様の突然の質問に僕はむせた。

遂にこのときが来てしまった。

僕は緋歌瑠様をみる。

きっと彼女は素っ気なく今日の出来事を言つたろう。

僕が如月の規則を守らなかった事を。

だが、彼女の表情は僕が想像していたものとは違った。頬を紅く染めていたのだ。

そして顔を下に向けたまま

「べ、べつに。なにも…」

「？」

彼女は言わなかった。僕がルールを破つた事に触れもしなかった。彼女なら絶対に言つと思つていた。

「そうだわ、あなたの婚約についてなのだけど…」

「！」

緋歌瑠様の表情が急に固まった。

そう、緋歌瑠様には婚約者がいた。本国のお金持ちとの結婚はつきり言つて政略結婚といつて間違いではなかった。

この如月家はこの島の地主だが、本国の富豪と比べればかなりの差がある。

たかが如月家のハクを付ける為の結婚だった。

そしてなにより緋歌瑠様はこの結婚を望んでおられなかった。

「緋歌瑠？」

彼女の箸が止まった。そしてそのまま箸を台に置く。

「私…もういい」

「えっ？」

そのまま彼女はかぐや様に目をくれずこの広間から出て行った。彼女は沈痛そうな表情をしていた。

「……………」

かぐや様が言葉を失う。

為すがままに緋歌瑠様の行動を見ているしか出来なかった。

僕も出て行く彼女を目で追っていた。

たとえ沈痛な面持ちでも其の美しさには代わりが無かった。

見とれてしまう美しさだけは変わらない。

僕とかぐや様はそのまま冷たくなった夕飯にまた箸をつけ始めた。

彼女がいなくてもこの広間は荒んでいた感じがした。

自分の机に置いてある緋歌瑠様のロザリオ。

「……………」

僕は知っていた。彼女がこの結婚をどれだけ嫌がっているかを。一度も島を出ていない彼女が一度も会った事も無い人と婚約をしたのだから。

普通の人から見ればそんなのは絶対嫌というに違いなかった。

白熱灯が僕の部屋を照らしている。一人の部屋。

夜と昼とでは自分の部屋の印象がまったく異なっていた。

今日は虫の音色さえ聞こえない…

僕は緋歌瑠様に会う決心をした。

このロザリオを返す為に、なにより今日の出来事を謝る為に。

机に置いてあった緋歌瑠様のロザリオを手に取ると僕は自分の部屋を後にした。

九月四日 式

九月四日 式

緋歌瑠様の部屋は僕がいる如月邸西から如月邸中心まで移動しなくてはいけなかった。

ふと疑問に思った事があった。

なぜ、緋歌瑠様は今日僕の仕事場までワザワザ足を運んだのだろうか？

こんな長い距離までを歩いて僕に用事があるなんて不思議に思っていた。

なぜ僕のところには？

緋歌瑠様の部屋の前まで来るとどうやら彼女はいないことが分かった。部屋の中が暗かったからだ。

(いないのか…)

僕はしょうがなくもと来た道を戻ろうと思って引き返した。
だが、

「えっええうっ…」

声が聞こえた。それも緋歌瑠様の部屋から。

もう一度障子越しに彼女の部屋を見渡す。

障子が閉まっていたから中は見えない。だが、暗いと思っていた其の部屋に一箇所だけ紅い斑点が揺れていた。ゆっくり暖かい紅い斑点が。

「うつええっひつく…」

間違いなかった。泣いているのは緋歌瑠様だ。
この声、間違えるはずがない。初めて僕は聞いた。彼女の弱々しく
泣くところを。

いつも明るいあのお嬢様が。

揺れているのはきっと高杯の灯台の灯りだろう…

その灯りが暗い部屋の中で揺れていた…

「どうして…私が婚約しなければいけないのよお…」

そう僕には聞こえた。

彼女は悩んでいた。悩んでいたんだ。

「……………」

僕は終止無言だった。声にできる言葉すらなかった。

（出直そう…）

そう思った。このまま彼女を一人にさせておいた方がいい。
いまは泣かせておくのが一番良いと思った。

（緋歌瑠様…）

「だ、誰…？」

「！」

突如声をかけられた。どうやら障子の向こうから月光で僕の影が透

けて見えていたらしい。

「あ、あの緋歌瑠様…」

声が詰まってしまった。

「！ 峻？ 峻なの？」

「緋歌瑠様、その…今日僕の所に来られた時、落としたものをお返しに参りました。」

ゆっくりと障子の扉が開いた。そして緋歌瑠様の顔が覗く。

其の隙間から見えた彼女の部屋はやはり部屋に常備されている高杯の灯台が灯っているだけでとても寂しい雰囲気を感じられた。

そして彼女の眼が赤くはれて、まだ瞳に涙が溜まっていた。

「これを…」

僕は唯一彼女とのつながりだったロザリオを彼女に手渡す。
できるなら返したくない、そう思ったぐらいだ。

「これ…」

緋歌瑠様がロザリオを見つめる。

「それと今日は申し訳ありませんでした。緋歌瑠様を侮辱してしまい申し訳ありません。」

僕は深々と謝って足早に立ち去ろうとした。

これ以上、泣き崩れた緋歌瑠様を見たくは無かった。

「それでは」

そう言つて、僕は身を翻し、自分の部屋に戻ろうとした。
でも

「緋歌瑠様？」

彼女が僕の袖を掴んで僕を止めた。

「見てたのね？…」

確信をつく言葉。

「な、なにをです？」

「……」

何とか平静を保とうとしたが声が裏返った。
彼女は気づいている。僕が、泣いている姿を見てしまった事を。
彼女の表情は俯いていて良く分らなかつた。

「峻… うつうつ」

僕の袖を握っている手が震えていた。

何度も。何度も。小刻みに…

隠した顔から涙が頬を伝う。

必死に涙を堪えていたが、涙が止まりそうにも無かつた。

僕はなんとか慰めの言葉を探した。

なんとかして慰めてあげたい。其の気持ちはとても強かつた。

「緋歌瑠様… そんなに嫌なら、嫌と言つべきです。きつと忠光様も分つてくれます。どんな親だつて必ず自分の娘の幸せを願っているのですから。」

でも、僕はそれを言う資格なんて無い。

緋歌瑠様が上を向き僕を見つめた。彼女の顔が涙に濡れていて頬がほんのり赤くなっている。

僕の言った事にまだ半信半疑な面持ちをしている。

「……」

「だから、泣き止んでください。僕は貴方の笑った顔の方が好きですから。」

そう言つてポケットからハンカチを取り出して緋歌瑠様に握らせる。そのまま緋歌瑠様はハンカチをぎゅっと握った。

僕は彼女の様子を見るまでもなくそこから立ち去った。

僕は思う、部屋にあつたあの高杯の灯火は彼女の気持ちに違い無いということに。

あれから僕は考えていた。

緋歌瑠様になぜ、あんな事を言ったのか。

僕は彼女に『だれだつて親なら娘の幸せを願っている』そう言った。でも僕にはもともとこんな事を言う資格なんて無かった。なぜなら僕は自分が愛する人を殺してしまったのだ。

其の人の幸せを僕が。

僕が、奪つてしまった…

本国にいた頃、其の人は僕をいつも支えてくれて下手な絵をどこまでも誉めてくれて。

僕はそれだけで本当に嬉しかった。

其の人は僕の為にいろいろ尽くしてくれた。

僕達は必然と愛し合った。

そして一緒に住み始めた頃、僕はまだ貧乏絵描きだった。

だからこそ其の人の両親が僕と一緒にいる事を認めてくれるはずが無い。

仕方が無く僕達は駆け落ち同然で一緒になる。

その生活は貧しかったが、それなりに幸せを感じていた。

其の人と一緒にいる事が何よりも楽しかったからだ。

でも、お金だけはそうはいかなかった。

僕の絵は売れない。

其の人は内職の掛け持ちは常だった。

その時に気づいていればよかった。彼女がどれだけ大変な思いをしていたのかを。

……。

気づいた時にはもう遅かった。

彼女は、疲弊しきつていて過労で倒れた。

僕がお金を借りる為に友人の家々に行っていた時だった。

僕が帰るまで彼女は…其の冷たい床に倒れて

僕の、遅い帰りを、待っていた…

そして、僕は…僕は

『どうして！！ 娘の幸せを奪ったんだ！』

父親の言葉すら理解できなかつた。

ただ……ただ、泣き崩れるしかなかった。

この僕が！ この僕が！！！！

この人を愛してしまつた為にっ

この人の幸せを奪つてしまつたのだ。

………僕が覚えているこの娘の父親の言葉は

『人殺しっ！！ 私の娘を返せえっ』

それ以降僕は人を愛する資格を持っていない事を確信した。

そのときやつと分つたのだ。

分つても、もう遅いのに……

いつの間にか自分の眼から涙がこぼれていた。

昔の事をただ思い出したただけなのに。 たつたそれだけなのに。

やっぱり僕には人を愛する資格などないんだ。

ふと眩しい光が射している事に気づいた。 もう朝になっていたらしい。

一晩中考え込んでいた事なんてほとんどなかった。

なんだか仕事をする気にはどうしてもなれなかった。

隅に置いてある僕が書いた絵がなんとなく無機物のようにしか見えない。

僕の心の傷はまだ癒えない。 癒えるはずが無いのだ。

愛しても幸せにできないのだから。

九月十六日

九月十六日

今日は絵を描きに如月邸の外に行く。

僕の一番好きな風景がある場所。

何度も何度もその風景を描き続けていた。

そのための準備をしていた時だった。

「峻？」

其の声に僕が振り向く。

この声は間違えようがない緋歌瑠様の声。

「どうしましたか？」

出来るだけ僕は素っ気なく答えた。

つい先日の事に話が及ぶのを恐れていた。

なるべく自分の気持ちを知られたくは無かった。

「…？ どこかに行くの？」

僕が持っている画板や鉛筆類、画用紙に絵具を緋歌瑠様が見た。

「夕日ヶ岬へ、絵を描きに。」

じっと僕の絵描き道具を見つづけ緋歌瑠様が顔を上げた。
そして一言。

「私もついて行っていい？」

僕の心臓が杭に打たれたような痛みを感じた。
ヒカルサマトイツシヨ？

聞いてみたい。僕と一緒にいいのかと。

でもそれは出来ない。

僕は少し考えた後、諦めの溜め息をつき、「はい…」と答えた。

夕日ヶ岬は如月邸の西方向にある。

歩いて約一時間。

この岬は夕日が水平線に沈む所を壮観に見られるため、島の住民達の穴場である。

岬から見ると一面の海、そこに沈むオレンジ色の夕日。それを見て感動しないわけが無い。

如月邸を出たのはお昼過ぎだった。

緋歌瑠様：

彼女は白のワンピースに白の帽子、そして銀のアクセサリ！。

一見子供っぽくも見えるが、彼女が着ると大人っぽく見えた。

僕が前に返した銀のロザリオもちゃんと掛けていた。

これ以上、清楚の白が似合う人がいるだろうか。

「峻は、どうしてココの絵を描くの？」

夕日ヶ岬に着くと、緋歌瑠様は僕にそう聞いた。

そうですね、と僕は呟いて岬から見える海を見渡した。

微風が潮の香りを匂わせる。

そして一言。

「好きですから。」

「えっ、それだけ?…」

「僕は自分がこれだと思った絵を描きたいんです。それなら例え下手でも気持ちだけはこもっているのですから。」

自分が描く構図を決め、画材の準備をし始める。
まずは紙と鉛筆で下書き。

「じゃないと、やってられませんから。」

そう言っ僕ははにかんだ。

「…私も、好きな事をやっていたい。でも、そんなこと出来ないから。」

緋歌瑠様がハンカチを下に引いて僕の隣に座る。
足を組んで顔を膝に埋めた。

「婚約なんて…」

「嫌なんですか?」

僕は緋歌瑠様の代わりに答えて緋歌瑠様の方に向いた。
彼女も僕と目が合ってそのまま視線を下に向けた。

「私だっ、お父様の言っている事はわかってるわ。でも、もう少し私の気持ちを考えてくれてもいいんじゃないのかなって…」

そつだ、後悔だけはしてはいけない。僕みたいに幸せを奪つてしまつてからでは遅いのだ。

なぜ、僕はこの人を好きになつてしまつたのだらう。愛しても僕には幸せに出来ないのに！

「でも自由だけが…その人の幸せとは限らないんだ…」

「えつ？」

本音が飛び出でしまつた。

僕は緋歌瑠様に幸せになつて欲しいのだ。不幸なんかはさせたくない。

例えそれが、不幸でなくても。

特に僕と同じめにだけは絶対に。

「なんて言つたの？峻」

「いいえ、何でもありません」

僕は緋歌瑠様から眼を逸らして下書きに集中する。

だが、其の下書きが順調に進むはずが無い。

「……緋歌瑠様。忠光様は絶対に貴方を絶対に幸せになつて欲しいと思つてゐるはずですよ。」

「……」

波の音がいやに静かだつた。

緋歌瑠様が立ち上がった。そして岬の先端まで歩いてゆく。

風で白のワンピースの裾が揺れた。

「お父様に言ってみるわ、私の正直の気持ち。」

くるりと僕のほうをむいてニコツと笑った。

正直、僕には複雑な気持ちだった。

彼女を慰めて僕にとつて何の為になるのだろうか。

ただ上つ面でしか言葉を言えない僕はこんな風でいいのだろうか…

「あっ！」

強い潮風が吹いた。結果、緋歌瑠様の白い帽子が風に持っていかれそうになる。

彼女は帽子を飛ばされないように片手で帽子を抑えた。

(……………これだ)

そこには僕が描きたかった構図があった。

岬から見える水平線に沈む夕日。そして帽子を片手で抑える白いワンピースの女の子。

僕に背を向け、夕日を見て黄昏る。

これ以上、描きたいと抑えきれないものがあっただろうか？

僕の心へ、書きたいという思いが抑えきれなくなっていた。

この絵を必ず描きたい。

「峻、そろそろ帰りましょう？」

「動かないで下さい！」

ビクツと緋歌瑠様が驚いて、啞然とした表情を見せた。

僕は急いで鉛筆を取り出して下書きに取り掛かる。

よどみなく僕の手が動く。これほどスムーズに動く事なんて無い。
僕はどんと絵の下書きを完成させていった。

九月十八日

九月十八日

如月邸の廊下を僕は歩いていった。
ついさつき、如月忠光様に呼ばれたので忠光様の部屋を目指して
いる。

あれから緋歌瑠様と僕はかなり打ち解けたように見えた。
以前みたいに素っ気なく、冷たく見られる事は少なくなっていた。
自分の気持ちは言わないけどそれだけでも十分だった。

「絶対に、私は嫌ですからっ!!」

忠光様の部屋から突如、怒声が聞こえてきた。
そしてすぐ目の前の障子が開いた。

「きゃっ!!」

緋歌瑠様が僕とぶつかり、よろりと体勢をくずした。
急いで彼女を支える。
そして気付いた。

「…………緋歌瑠様？」

彼女が僕の顔を見上げた。
彼女に眼には透明の液体。それに僕が気付くと緋歌瑠様は顔を下に
向けた。

「……………」

下を向いたまま何も言わなかった。

「どうしまし…」

言いかけた時、緋歌瑠様は突然僕を跳ね除けた。

そして眼を合わさず僕の横を通り過ぎ、走り去ってゆく。

「！」

緋歌瑠様が心配だ。忠光様と何かあったのだろうか？

そう思いながら、僕は悩む。彼女の後を追いかけれなかった事に。ただ、愛する資格が無い、と。心の鎖に締め付けられて。

「失礼します」

「桑野君か、すまぬな。こんな夜が更けてから呼んでしまった。」

忠光様の部屋に入ると、和服姿をした忠光様が上座に座られていた。堂々とした雰囲気、威厳を持ち合わせ、冷静沈着。

それが、僕が初めて見たときの忠光様の第一印象だった。

「それで、お話とは？」

僕は下座に座った。

忠光様が自分の顎をゆっくりさすった。

「うん、君に緋歌瑠の事について聞いておきたい。」

「えっ??？」

予想外だった。僕になぜ緋歌瑠様の事について聞かなくてはいけないのだろうか？

「最近、緋歌瑠はよく桑野君の所に行くと言っている。頼みがあるのだ。実は緋歌瑠の婚約についてなのだが、あの子がどうしても承しないのだ。それで、できるなら君が緋歌瑠を説得して欲しいのだ。」

「！」

なんだって？ 僕が緋歌瑠様を説得？

「どうだ？」

僕の視線が泳いだ。僕が見ているのは唯の壁。

冷たくて何も質感がない唯の壁。

どうして僕に説得できるだろうか？

彼女を慰める資格さえないのに、それなのに僕は自分の愛の為に慰めてしまったのだ。

今度は彼女を傷付けろ、と。そう言っているのか？

僕には彼女を裏切る事が出来ない。これは彼女の人生なのだから。

何より、僕は今まで築いてきた彼女との関係を壊したくないんだ！

「出来ません。」

「何故だ？」

「僕に彼女を説得できるはずが……」

そう言葉で言っていたが、僕はなんて無責任なんだ。
なんて忌々しい人間なんだ。

心の奥底では、僕はそんな事を言いたくないと思っている。
だって!!

彼女を愛しているのだから!!!

それを分っていて、僕は彼女との関係を壊したくないと嘘をついている。

本当の気持ちを言わないで。

「わかった、すまぬな。」

「すみません……」

数秒の空白の時間が流れた。

「……君が緋歌瑠を説得したのか？」

「……っ」

僕は答えられない。

そして、そうか……と忠光様が言葉を漏らした。

「道理で、緋歌瑠が婚約を破棄してくれというはずだ。あの子は決してそんな事を言わない子だったのに。」

「どういう意味です？」

なんでも親の命令に逆らわないということなのか。

ふっと忠光様の顔が暗くなった。

なにかの絶望を味わったような表情。

そしておもむろに口を開いた。

「ついさっき、緋歌瑠が私のところに来て婚約について話し合った。だが、私は破棄してくれという緋歌瑠の言葉に耳さえ傾けなかった。」

ついさっきの怒号はそれの事だったのか。

「そして、私は言ってしまったのだ。」

オマエハ、キサラギノハンエイノタメニイルンダ。
ジユウナンテ、オマエニハイライナイ。

「！」

今、あんたはなんて言った？
緋歌瑠様になんて言ったんだ？

「私はあの娘の事を考えて……」

「ふざけるなっ！！！」

あの娘の幸せを考えてだつて？

どこが幸せなんだっ！

金持ちと一緒にになって確かに富は手に入る。

でも、それが幸せとは限らない。

抑えきれない怒りが僕の身体を駆け巡る。

僕は忠光様をにらんだ。睨む事しか出来なかった。

「……………っ」

僕は我慢できず、席を立つ。

怒りで何をしているのか良く分らなかつた。

「まで、まだ話は終わっていない。どこに行くつもりだ？」

「緋歌瑠様のところへ。」

彼女はあなたを信じていたんだ。僕の言ったあの言葉を信じて。

それなのに彼女の苦しみも理解しないで、彼女の気持ちを踏みにじって。

どれだけ辛いと思っているんだ！

本当に最後の希望だったんだ。あなたなら、きっとどうにかしてくれると。

「おまえは、緋歌瑠のことを愛しているのか？」

僕は忠光様に背を向けたまま答えない。答えたくも無かつた。怒りで手が震えていた。

「だが、お前に緋歌瑠は愛せない。」

！！！！

「私はお前の過去を知っている。だからこそ、おまえには緋歌瑠は愛せない。」

そんな事言われなくてもわかって……………

わかって……………

わかっているんだ。

「……失礼します。」

僕はそのまま忠光様の部屋を後にした。

僕は勘違いをしていたのかもしれない。

緋歌瑠様はもつと、ずっと苦しんでいたのかもしれないと

それならば、あの時僕に言ったのは助けて欲しかったから？

それとも希望にすぎりついていたかったからか。

だとしたら彼女は…

急いで僕は彼女の部屋に向かった。

彼女の部屋は、明かりがついていない。そして人の気配さえしない。

僕はゆっくり障子を開ける。

部屋の中は嫌に閑散としていて闇に包まれていた。

あけるとすぐ前に緋歌瑠様がいた。僕に背中を見せて座り込んでいた。

「緋歌瑠様？」

ゆっくりと彼女がこっちを振り返った。

瞳の中からとめどなく涙が頬を伝っていた。

「」

絶望の淵に立たされたような泣き方だった。

希望はもう闇の中。

遙か先にあるのは束縛という名の婚約。

「こ、来ないで…」

緋歌瑠様が震えながら、か細い言葉で言った。
そして彼女の手に。あるモノがあった…

(緋歌瑠様?)

「来ないで　っ!」

銀色のナイフ。鈍色のナイフ。

目を疑った。これが、夢ならどれだけ良いことが。

すでに彼女の左手にはいくつもの切り傷が見られた。

彼女は！　死のうとしたのだ!!

其の傷は何度も何度も死のうとして切ったものだ。でも、うまく切れてはいなかった。

そして、もう生きていても仕方がないと。そう心の中で決め付けてしまったのだ。

「緋歌瑠様、やめてください。それを離してください!」

僕は彼女に促すがそれは彼女の為ではなく、自分の為に言っていた。

そう、僕の為に。彼女には死んでもらいたくは無い。

彼女の婚約なんてどうでもいい!

そう思っている自分がいた。

「うそ…　嘘つきっ。お父様に言えば分ってくれるって言ったじゃない…」

そう…言ったじゃないっ!!　と彼女の叫び。

この言葉が僕の心を打ちぬいた。痛々しいまでの心の叫び。

「でも、お父様は私のことなんて愛していなかった！ あの人の頭には如月の事しか頭に無かったのよっ！！ うううっ」

彼女の涙が数滴畳に落ちて滲んだ。
緋歌瑠様が首を横に何度もふった。

「私を…愛してはくれなかった…」

！

アイシテ…イナカッタ？

「誰も、私を愛してはくれなかった！！」

泣きながら緋歌瑠様はそう叫んだ。

もう誰も彼女の涙を止める事は出来ない。

そして誰にも彼女の心を癒せるものなどいない。

僕には何も出来ない。

(違っ…)

「帰ってっ！ お願い」

そう言っても彼女は其の手に持つナイフを離さない。
離してくれ、緋歌瑠…

「それを離せ…」

「聞こえないのぉっ！！ 早く帰ってよっ…！！」

「それを離せっ！！ 緋歌溜っ！！！」

ばしっ

僕の右手が彼女の頬を打った。

一瞬の沈黙が広がった。

「っ……………僕は、ある人の幸せを奪った。」

「…？」

僕の一番大事な人の幸せを。

「だから、僕に言う資格なんて無い。君を慰める事も出来ない。」

でもそれも違った。

君の為に僕は…本当にどうにかしようとして一生懸命だったんだ。

「それでも言える。誰も君を愛さないなんて…」

僕は言葉を切って、渦巻く感情に体を震わせた。

「峻…」

「そんな事言ったら、ぼくだけ…カッコ悪いじゃないか…」

僕も我慢できなくて泣いていた。

君の事がこんなにも好きなのに。それなのに自分を否定するなんて。

「そんなの辛すぎるよ……………」

「…」

「もう、辛い思いなんてさせない。僕が君を支える。」

「！し、峻…」

だから、もう死ぬなんて言わないでくれえっ…

「えっうううっ　　峻！」

彼女が僕の胸に飛び込んできた。僕もそれを一生懸命支える。離さない。離してたまるか。

彼女が僕の胸で大声を出して泣いた。僕も泣いた。

まるで今まで耐えてきた悲しみを分かち合うかのように…

また、僕にも大切な人が出来た。

「ありがとう…　峻。」

僕達はそのまま二人ベッドの上に崩れた。

二人で愛す為に。

どちらにも、誰かが愛してくれている事を確かめる為に。

僕達は肌を合わせた。

もう、緋歌瑠には悲しい思いをさせない。

絶対に。

九月十九日

九月十九日

僕はゆっくりと目を開けた。
周りを見渡すと、緋歌瑠の部屋にいた。
障子の外には漆黒の暗闇が広がっている。
外からの光は神々しく光る月の光だけ。

「僕は……っ？」

布団から起きて自分の両手をゆっくりと眺める。
そして次第に手が震えだしてきた。そのまま頭を抱えて悶える。

(やってしまった…)

僕は彼女を愛しすぎてしまったのだ。
彼女の吐息、それに柔らかな匂い。実際、まだ実感が残っている。
外から虫の音色が聞こえてきていた。
諦められない。どうしても頭から離れない。
彼女の顔が！
彼女の声が！
主、忠光様は僕に諦めるとそう言った。
でもそんな事出来るはずがない。
分っている。僕が彼女にとってネックだと言う事を。
彼女を幸せに出来ない事を。
分っているんだ！

「峻？」

其の声に僕は振り向いた。
見ると障子の戸が一箇所だけ左右に開いている。
その障子の隙間の奥に緋歌瑠が佇んでいた。
彼女は縁側に座っていて、こちらからは背中しか見えないが、闇に
浮かぶ白い満月を眺めているようだった。

「緋歌瑠…様」

彼女自体が白月の光を浴びて、より神々しく、凛々しく見えた。
天女にすら間違いそうな美しさ。

「…わたし…わたし…」

緋歌瑠の声が上ずっていた。

彼女の目に涙がうつすらと溜まっているのが此処からでも分った。

「峻、あなたが好き。」

「…」

僕は言葉が出ない。

「自分でも恐いの。あなたを見ると…なにか心の中で」

彼女が本当に泣いていた。

彼女にふさわしくない事は事実。

それでも僕はここで彼女を抱きしめていいのか？

彼女に触れていいのか？

緋歌瑠は声を出して必死に涙を拭っていた。

それを見て僕は

「緋歌瑠」

ゆっくりと彼女を胸に寄せて抱きしめた。

「峻……私はあなたが」

本気なのだ。彼女は本気なのだ。

「僕も愛してる。」

もう…僕は戻れない道を進んでしまった。

彼女の顔を見る。

すぐ近くにある緋歌瑠の顔。

安心した表情で微笑んでいる。

僕は右手で何度も彼女の髪を撫でた。

「……」

彼女が眼を瞑った。

僕も彼女に顔を近づける。

『お前に緋歌瑠は愛せない』

脳裏に、突然騒音のようにその言葉が響いた。

そして彼女の息が聞こえる距離まで顔を近づけ、僕は止まった。

愛せない、愛せない、愛せない。

僕は…

「峻？……」

緋歌瑠が眼を瞑ったまま僕に問う。

僕も眼を瞑ったまま自分に問う。

緋歌瑠を抱きしめていた手を彼女の両肩におき僕は彼女を離れた。

「緋歌瑠様、申し訳ありません。僕にはあなたを……」

アイスコトハデキナイ

「ど、どうして……？ 私が嫌いなの？」

そんなはず、ある訳無かった。

僕は彼女を誰よりも愛している。

でも愛せない。僕にはあなたを愛す資格など
在りはしなかった。

十二月十三日（前書き）

たとえば、どんな機械仕掛けの神が存在しようとも、彼らの破滅を止められる者はいない。

十二月十三日

十二月十三日

僕達はこの三か月何度愛し合い、離れあつただらう。

時には喧嘩し合い、時には共に笑い合った。

それでも僕達は離れる事はなかつた。

緋歌瑠との思い出は僕の、僕達の、宝物だつた。

「峻、お願いがあるの」

振り向くと緋歌瑠が僕の後ろに立っていた。

彼女の手にはお盆が。

其の上に一杯の水、そして青紫の小さな花をつけた草があつた。

「これは？」

彼女の目が一瞬泳いで僕の視線から外れた。

そして申し訳なさそうに口を開いた。

「勿忘草……」

「えっ？」

ワスレナグサ？

「この島だけに咲く異質な草。この草を摘んできた人の全てを、飲んだ人は忘れるの。」

「！」

忘れる。それは恐怖の象徴。

「私はあなたを愛しすぎてしまった。もう、忘れる事は…」

「どうしてっ！」

僕達は共に愛し合ったはずだ。

緋歌瑠は僕と眼を合わさない。ただ、苦しみを我慢しているような表情だった。

時計の針が時間を刻む。

チクタクチクタク

「忘れるしかないのっ！」

突如、緋歌瑠が大声を上げた。ついさっきの僕の言葉に対する返答なのか。

緋歌瑠が泣いていた。

僕は言葉を失った。

「もう、全部遅かったのよ…」

それってどういう意味なんだ？

僕は緋歌瑠、君の事を忘れろって言うのか？

出来ない、出来るはずが無いっ

「もし、破棄するなら、如月家を…」

本国の婚約者が如月を取り潰す。

「！」

「これ以上、お父様にもお母様にも迷惑を掛けたくないの…」
家族の為に婚約を取るって言うのか？

「私は、誰よりもあなたが好き。」

「じゃあ、…なんで」

「私はもう戻れないの…」

現実と成ってしまった。

僕が恐れていた事が。

緋歌瑠も僕と同じように大事なものを捨てようとしている。

僕は他者から奪われ、緋歌瑠は自分から捨てようとしていた。

「…」

僕は首を何度も振った。

「お願い、飲ん…うっうっ」

最後まで緋歌瑠は言葉に出来ず、嗚咽をこぼした。

僕は緋歌瑠を見つめる。

……っ

僕がまた愛してしまったからだ。

こんな事さえなければ緋歌瑠はこんな悲しむ事なんて無かった。
無かったのだ。

僕のせいだ。

本当はわかっている。彼女が泣いた時から。

僕は緋歌瑠を忘れたくないと！！

でもそれも出来ない。

僕達は…僕達は忘れるしかないのだと。

わかっているのだ！

僕は緋歌瑠を

…愛さなかったほうがよかったんだ…

「私は…あなたといれて本当に良かった。」

「！」

緋歌瑠が僕を見て笑った。泣いている表情で無理やり。

「できるなら、私だって…忘れたくなんてっ」

「緋歌瑠っ！」

僕は彼女を抱きしめた。力いっぱい、彼女を放さないために。何よりつながりを失わない為に。

「どうして私達っ、愛し続けられないのおおっ！！！！」

緋歌瑠が嗚咽をこぼして、そう叫んだ。

僕達、二人は泣いた。

大声で、大粒の涙をこぼして泣きつづけた。

「峻…」

何も言わなくていい。
間違いじゃないっ
僕達が愛し合ったのは
間違いじゃなかった!!
これでよかったんだ。

……
よかったのだ!

緋歌瑠が落ち着いたのを見て僕は彼女を離す。
行く先はテーブルの上に置いてあるお盆。
そしてコップと勿忘草をとる。

「っ 絶対に忘れない。忘れないから!」

緋歌瑠が両手で口を覆う。

緋歌瑠から言葉がでない。ただ、何度も何度も首を縦に振っていた。

(私毛)

そう言っているようだった。

僕は勿忘草を口に入れる。間をいれずに水を飲み込んだ。

「緋歌瑠… 愛してる…」

そのまま僕は地べたに崩れて、気を失った。

……
これでよかったんだ…
緋歌瑠…。

エピローグ 十二月十四日

十二月十四日

僕は目を開けた。

天井は白。二本の蛍光灯にリノリウムの床。
そして医薬品特有の匂い。

「ここは？」

周りを見渡して此処が病院だと言う事が分った。
そしてなぜ自分がここにいるかを考えてみた。

「????？」

分らない。何故僕はこんなところにいるんだ。
何をしていたんだ？

全く記憶に無かった。

数年前、都会にいて絵描きをしていた後から全く記憶が無い。
一体、何をしていたんだ

「桑野さん、お調子はいかがですか？」

看護婦が僕のところまで来て問う。

「僕は…？」

「あなたはつい先日この病院に搬送されてきたのですよ」

全く意味がわからない。

どうして病院にいるのか分らない。

そして看護婦は言う。

あなたは何も異常がなかったのに運ばれてきたのです、と。

「……………」

不思議だ。

ならどうして僕が病院に？

ちやりっ

？

僕の手の中に何か握られていた。

ゆっくりと手を広げてみる。

「これは…？」

「ここに来た時からずっと持っていましたよ。」

看護婦がそれを見て言った。

治療中も搬送中も、私たちがそれを取ろうとしても

「貴方はそれを離しはしませんでした。」

……………それは銀のロザリオだった。

僕のじゃない。

見たことが無い。知らない。

シンプルな銀の十字架、美しいロザリオ。

どうなっているのだ？

僕は一体、コレを、

いつ？

どこで！

「なにかあったらコールしてください。」

看護婦がそう言って出て行った。

一人ぼっちの病室はとても冷たいものとなった。
そして静かだった。

「……ははははっ」

僕は意味もなく、無機質に笑った。

銀のロザリオを握り締めたまま。

バカらしくて笑いが止まらなかった。

病室に笑い声が反芻する。

「ははは　　うっ」

突然、悲しみが僕の心の中に広がった。
わからない。

この銀のロザリオは僕にとって大事なものだった。

思い出せないけど、そうに違いなかった。

そして、なにか悲しい事が。辛い事が。

あつたはずなのだ！！

それが思い出せない。

「うっ、うっ、あ……」

必死に声を抑えようと、シーツをしわが出来るほどぎゅっとぎゅくと握る。

悲愴。

もう、こみ上げてきたものに我慢できなかった。

「うわあああああああっあああああああー!!」

僕は我を忘れて泣きつづけた。

わからない。

どうしてこんなに悲しいのか教えて欲しい。

教えて欲しかった…

一体、僕が何を失って、何を手放したのか!

十字架に茨が播きついているシンプルなデザインの銀のロザリオ。

それだけが、なにかの絆に違いなかった…

僕はそのままロザリオに眼をくれた。

涙でその銀のロザリオが歪んで見える。

もう、戻れはしなかった。

結局、僕の手には銀のロザリオだけが残った…

エピソード　十二月十四日（後書き）

エピソード

あの後僕は自分の住むべき領域に戻った。

部屋にはいくつもの絵、絵、絵。

今の僕にはそれさえ無機物にしか見えない。

そして其の絵の中に一枚だけ。

一枚だけ、

描いた覚えが無い絵があった。

水平線に夕日が沈む所に白のワンピースをきた女の子。

とても僕が描いた絵とは思えなかった。

その絵のタツチから、何かを訴えかけられているに見えた。

心の芯から揺さぶられる、そんな気持ちになった。

今の僕にこんな絵はかけない、そう思った。

そしてまだ気付いていない。

其の女の子の手にあの銀のロザリオが合ったことに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6363c/>

勿忘草其一 僕の手には銀のロザリオ

2010年10月28日02時45分発行